2022年8月1日(月)　奥津比咩神社

名舟大祭 - 本祭り
御奉納神事

8月1日【本祭り】　14:00 ～ 16:00頃

14:00　御仮屋で本祭りが始まり、山車に乗った御陣乗太鼓の先導で神輿が出発します。

14:40　白山神社の広場に到着した後、
再び海中に立つ鳥居の前で、御神霊をお送りする御神事が執り行われます。

15:00　白山神社下のステージでは、御陣乗太鼓の奉納打ちが行われます。

15:30　神輿が白山神社に到着して拝殿に入場します。

＊祝詞奏上

＊奉納舞

神輿を奉安し、還幸祭が執り行われて例大祭は終了となります。

※スケジュールはあくまで予定です。

名舟大祭について

[参考サイト]
ほっと石川旅ねっと

舞
－ 奥津かぐや姫ものがたり －

アマミ千龍（舞）

今回、 奥津比咩神社のご神事のために特別に振り付けられた「奥津かぐや姫ものがたり」をご奉納する。アマミ舞は、舞い手が依り代となり、舞を通して神人合一を実現する「祈り舞」である。アマミ千龍は、アマミ舞創始者の鶴阿彌氏の直弟子として、今年の名舟大祭に派遣された。

奉納演奏

木村 俊介（和楽器奏者）

和楽器奏者（笛・三味線他）、作曲家として活動する一方、様々な舞台作品の音楽監督を務める。自作曲によるコンサートでは、心情風景や心の動きをモチーフとした音楽で独自の世界を展開している。また、日本各地の民俗芸能の施法・リズムを取り入れた音楽は海外でも高く評価され、世界五大陸35ヶ国の音楽祭に招聘出演している。

小野 越郎（津軽三味線）

秋田県仙北市生まれ。18歳より津軽三味線を山田千里師に師事し、本場青森県は弘前にて修行を積む。世界的な民族音楽フェスティバル「WOMAD」をはじめ、世界20カ国以上の音楽祭などに招聘出演し好評を得る。津軽三味線の持つ力強さや独特のリズム・音色の多彩さを基に独自の表現を求めて創作活動を続けている。

茶喜利（吟遊詩人）

静岡出身。日印国交樹立50周年の記念に作られたインド三味線に即興の詩を乗せて奏でる吟遊詩人。これまで多くの国で演奏経験を持ち、現在は浅野温子氏「古事記よみ語り」の音楽を担当するなど、日本各地の神社仏閣で祈りの音を奉納している。

奥津比咩神社・白山神社
〒928-0254 石川県輪島市名舟町ト64乙

写真提供：北岡周治
(裏面参照)

創作神楽舞『奥津かぐや姫』由緒

遠い古（いにしえ）の世から能登半島に伝わる美しい愛の物語があります。お月様にお住まいになられる奥津かぐや姫と、地上の男神である天冬衣命（あめのふゆきぬのみこと）は、強い絆で結ばれていました。

この夫婦神が比翼連理となって愛の契りをなされるたびに天地（あめつち）の陰陽が和合し、人の世に平安と繁栄がもたらされると、能登の人々は世々代々語り継いできたのでした。だからこそ現代に至るまで、人々は神々への感謝を込めて夏の夜に太鼓を打ち鳴らし、威風堂々とキリコを担ぎ、夫婦神の逢瀬を寿いできたのです。それが能登半島の津々浦々で、今も盛大に営まれているキリコ祭りの始まりなのです。

あたかも北前船の帆を想わせるようなキリコには四本の柱で囲まれた「中ふく」と呼ばれる筒状の空間があり、夜になるとそこに明かりが灯されます。その煌々とした光こそ、男女神の愛の交歓を現わしているのです。

奥津かぐや姫がお月様から能登の浜辺に降り立つ夜には、天空に美しい月が輝いて、海面がきらきらと輝くのでした。そして夜明けとともに、奥津かぐや姫は再びお月様にお戻りになられ、そこから人の世の安寧を見守っておられました。

ところが、ある年を境に人の世に地震や戦、疫病などの大きな試練が次々と訪れるようになりました。能登の人々は、楽しみに待ちわびた祭りも出来ず、先の見えない不安に怯えながら暮らしておりました。

お月様からその様子を見ておられた奥津かぐや姫は、人々の耐え難い苦しみを知り、定められた日以外には月の世界を離れてはならないという掟を破り、あえて地上に降り立つことを心に決められたのです。

そして故郷に永遠の別離を告げた奥津かぐや姫は、神代の香りを放つ梅の枝を手に取り、天冬衣命が奏でる篠笛の音色に合わせて、昼夜を分かたず舞い続けられました。

地球を覆い尽くす疫病や天災や争いの根源が、大地への感謝を忘れ、我欲に溺れた人間の罪業であることをご存じだった姫は、祈り舞を通じて天の許しを乞われたのです。やがて奥津かぐや姫の思いは天に通じ、人々は神性に目覚め、再び平安が訪れました。

それ以来、能登の人々は、お月様に帰ることができなくなった奥津かぐや姫を、遥か彼方の海上で不思議な光を放っていた沖つ島（舳倉島）にお祀りし、その御恩を忘れぬために、年に一度の逢瀬の祭りを大切に伝承していくことを誓ったのでした。